

刊行にあたって

このたび日本リウマチ学会関節リウマチ超音波標準化小委員会（以下超音波標準化小委員会）により、「関節エコー評価ガイドライン」が出版されることになった。本書はすでに刊行された「関節エコー撮像法ガイドライン」の姉妹書であるが、我が国における超音波診断の充実に大いに寄与すると考えられ、日本リウマチ学会としては喜ばしい限りである。

関節リウマチの治療においては早期の診断と治療介入が最も重要な課題となっている。ACR/EULARにより提起された診断基準はこの目的に沿って提唱されたが、血清学的所見が陰性で腫張関節が限定されている場合にはしばしば診断が困難で、超音波検査はその一助として有用である。また、“Treat to Target”を実践するうえで治療効果を客観的に評価することが求められている。治療目標をどこに置くべきか議論のあるところであるが、超音波検査による画像的寛解も検討されるべき課題となっている。このように種々の観点から関節超音波検査の有用性が注目され、日常診療の場で広く用いられるようになってきた。その有用性を評価し、議論するためには画像所見の客観的評価と認識が重要な課題となっている。しかし、その評価は術者の主観に依存するところが多いことが問題とされていた。本書は、この評価者による重症度分類のばらつきを改善する目的で企画された。実際の刊行にあたっては、超音波標準化小委員会の各施設から集められた多くの画像の重症度を各委員が評価し、「正常・軽度・中等度・高度の異常」の4段階に分類している。そして、それぞれの重症度の典型的な画像を中心に採用し、それを基準として検査にあたる人々が共通の評価を行えるように考えられている。

この標準化は、今後の関節リウマチ診療の充実にきわめて重要な意義を認め、特に治療法の評価の確立に大きく寄与すると思われる。また、本書では重症度分類の際に誤りやすいピットフォールも紹介され、日常診療の場で大いに活用されることを期待している。

2014年 4月

一般社団法人 日本リウマチ学会
理事長 高崎 芳成